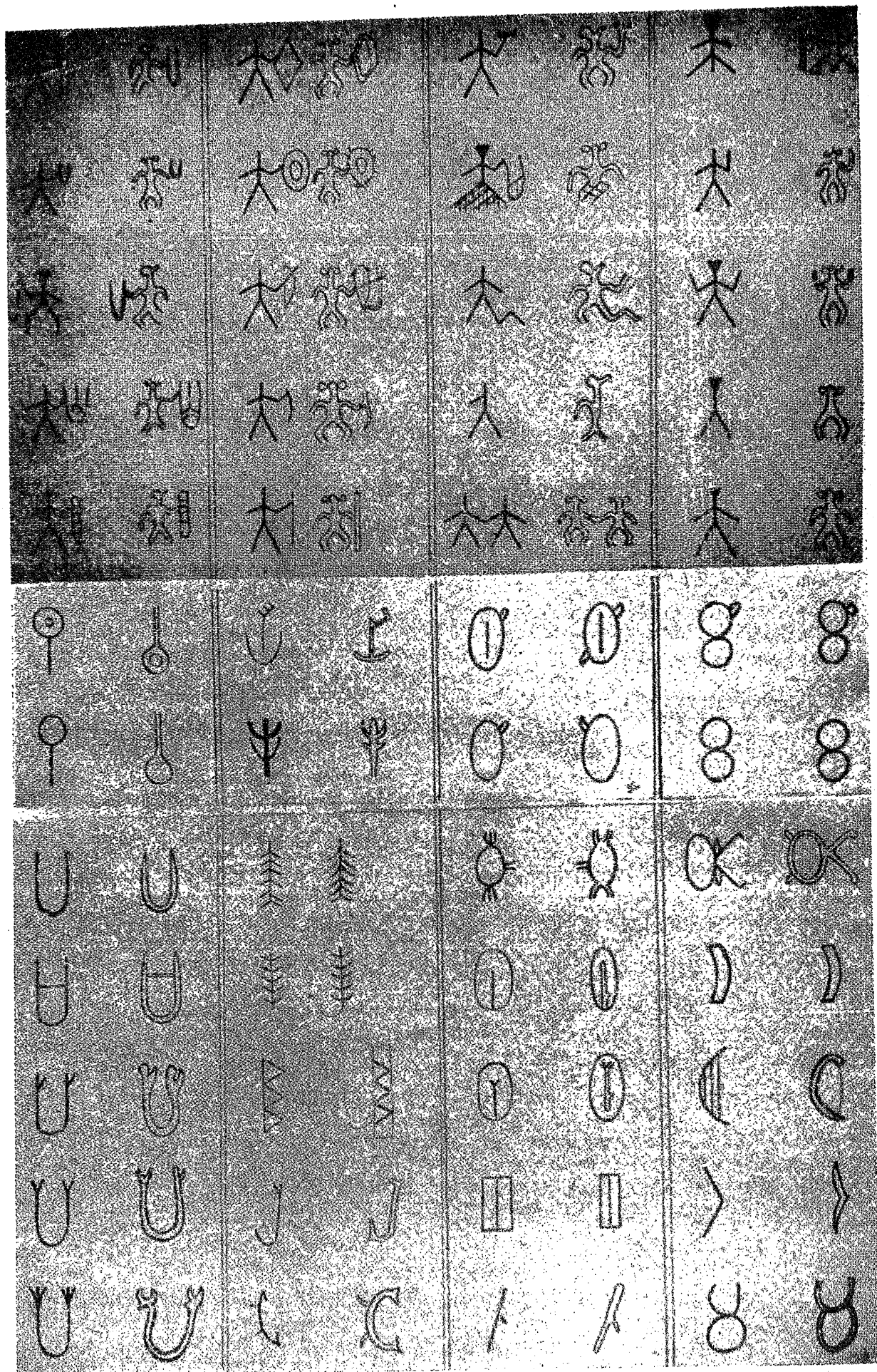


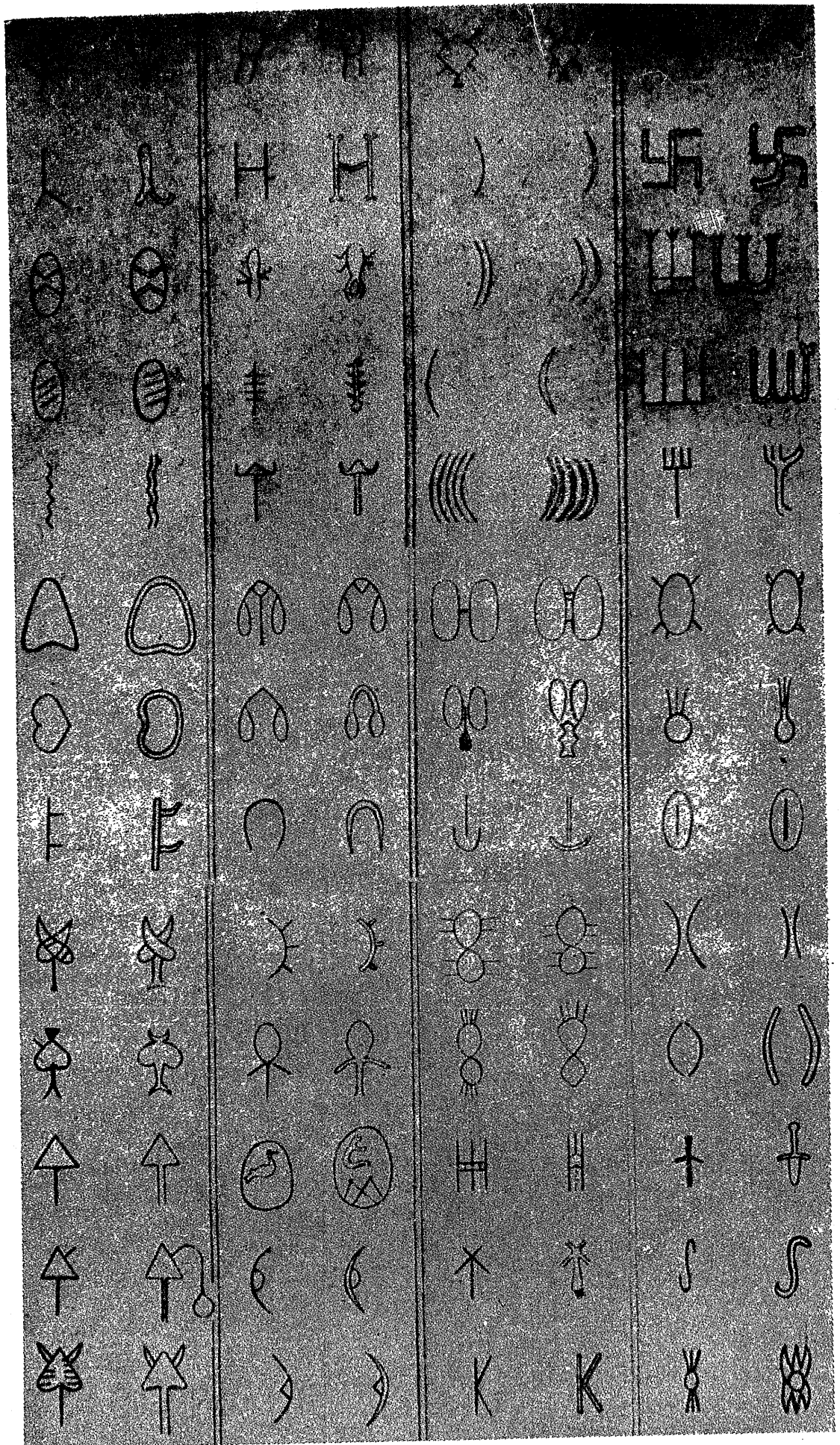
Title	インダス文字に関するド・エヴェジイ氏の新発見(上)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.147a- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



第一圖 インダス文字とイル・ド・パーク文字との比較
 (四列中インダス文字は左行、イル・ド・パーク文字は右行)



第二圖 インダス文字とイル・ド・パーク文字との比較
 (四列中インダス文字は左行、イル・ド・パーク文字は右行)

インダス文字に關するド・エヴェジイ氏 の新發見（上）

松 本 信 廣

モヘンジョ・ダロの古代文化遺蹟から發見され
た印章の未解讀文字に就てのド・エヴェジイ氏^{（註）}の
新發見に關しては、ペリオ氏が一九三二年九月十
六日フランスの學士院^{アカデミー・デ・サン・スクリプシオン}金石及び文學部に之を報告
して以來、世人の注目を惹き、吾が「史學」第十一
卷第四號には間崎万里氏が餘白録に週刊タイムズ
九月二十九日號に掲載されしデニソン・ロスの記
文によりその紹介をされた。所が最近同氏から昨
年六月二十三日フランス先史學會でされた講演筆
記の抜刷を惠贈されたので此處にその概要を紹介
することにする。題名は「新石器起源らしきオセ

ニア文字に就て」M. G. de Hevesy, Sur une
écriture océanienne paraissant d'origine néolithique
であり、Bulletin de la Société Préhistorique F-
rançaise, No 7—8. 1933 に發表されたものである。
以下はその抄譯である。

吾人は皆アリア人の渡來以前印度には蠻族のみ
棲息せりと教はつてゐた。然し今日サー・ジョン・
マーシャル及びその協力者のモヘンジョ・ダロ及
びハラッパに於ける發見により、或點に於てはそ
の同時代のスメル、エジプトの文明より一層發達

した文明の中部印度に繁榮したことが知られるに至つた。

モヘンジョ・ダロは最新都市と拮抗出来る位計畫的の都市的プランに従つて建てられてをる。その幾層になつた廣大な家屋は浴場や其他の衛生設備を有し、その汚水はバリーの下水と殆ど變らぬ大いさの穹窿暗渠で排水されてをる。またその住民の藝術的意識は多くの遺品によつて證據だてられてをる。

此新發見の文明はアリア文明ではありえないと云ふことは直ちに認められた。アリア人は村落しか持つてゐなかつたのに此處では都市が見られるばかりである。アリア人は木と竹とで建築したのに此處では今日でもこれ以上期待出来ぬと思はれる精巧な陶製赤色煉瓦で疊まれてをる。アリア人は魚を食用とする事ごく稀れであり、皆無と云つても好いが、モヘンジョ・ダロでは魚が最も悦ば

れた食膳の一つであつた。アリア人は牝牛を神とし、今日もなほ變らないが此處では牡牛が崇拜されてをる。アリア人の民族的偏見は絶對的であるが、モヘンジョ・ダロではその反對で、同地發見の頭骨は既に少くとも四種の異なりし人種から成つた住民の存在せしことを示してをる。

かういふことを述べるときにはないが、自分は特殊な二點に諸君の注意を惹きたい。インダスより來た品物が、スメルで發見される一方、またモヘンジョ・ダロで發見される金屬及び石類により、印度の都市はごく遠隔な地方、即ち黒海とかピルマはては硬玉が證明する様に中央アジアにまで交通したに相違ないことが證據だてられる。

第二のより重要な點は此新發見文明は、その地理的擴りと云ふ點に於て、以前吾人の知惹きたあらゆる文明に優つてをつたに相違ないと云ふことである。なせならば先づ第一にモヘンジョ・ダ

中には城壁がなく、國境都市でなかつたことを想像せしめる。第二に丁度バリーとピレネーとの間位離れたハラツパに同種遺物が發見されたからである。最後にサー・ジョン・マーシャルは數週間前にタキシラから、四月終りの日附けで次の如き手紙を呉れた。曰く「發掘の鶴嘴を待ち、僅少の資金と僅かの企業的精神があれば、『人類の歴史の最も魅力ある一章』を解明するに足りる何十と云ふ遺蹟地を發見し得た。」また曰く「フランス及びその他の國々が速かに自國の遠征を送り此先史時代の遺物の探査に有力な分前を演ずるに遲疑せざらんことを望む」と。

此文明はまた文字を持つてをり、當時のあらゆる文字と同様象形的である。その文字の大部分は耐久的ならざる材料の上に記入せられ、恐らく永久に滅びてしまつたであらう。然し幸運にも文字を滿載した若干の銅片及び非常に澤山の凍石製印

インダス文字に關するド・エヴェンジョイ氏の新發見（松本）

章を發見した。此等の印章は宗教的用途に使用されたものらしい。イギリス人の相當な家庭に必ず一本の聖書を備へてある様にモヘンジョ・ダロでもハラツパでも發掘された家々には必ず殆ど差別なくかやうな印章を發見した。

動物が家々の守り神であり、さういふ動物に獻じる獻物の傍に此等の記文、またはこれによつて得た捺印を置いたと考へられる。かういふ一種の訪問名刺により、各人は此動物神に、その傳達したいこと、殊に獻物を捧げし者の名を傳へようとしたのであらう。さういふ動物の中には家畜たる牡牛、水牛の類もあれば、野獸たる虎、犀、象から鰐までが見出だされ、その像のそばに銘が刻されてゐる。

一方從來發見された極めて數多き印章、全部で殆ど千位ある中、西方であれば重要な位置を持つてをる野獸の王、獅子が一回も未だ發見されな

いことを認め得た。もし此缺漏が偶然でないとしたならば、勘ふべき事柄である。モヘンジョ・ダロの人々が獅子の棲息しない東方から到來したことを斷言することが出來ないであらうか。

新文明の文字は精密に英國學者オクスフォードのラシドン博士、及びハンター博士によつて研究された。是等の學者は、讀破に成功はしなかつたが、多くの興味ある檢證をなすことが出來た。即ち彼等は、文字の方向は、右から左であつたと云ふことを認めることが出來た。次にわかつたのは多くの場合それは、交互に向きの變り、前行は右から左へ書き、次行は左から右に書くと云ふ風なブリストロフドン *boustrophedon* 書風であつたと云ふことである。

此最後の檢證は自分に殊に興味ある様に思はれる。と云ふのはインダス地方に於ける文字の使用は、非常に擴がつてゐたに相違なく、印章上の文

字に限られてゐなかつたと云ふことを結論することが出來るからである。

實際古代に於て何故にブリストロフドン書風によつたのであらうか。またかの各行の文字を字板を讀み乍らひつくり返しさへすれば上部に置かれる様な書風をとつたのであらうか。それは常に一つの行から次の行へ確實に移り得んがためであつた。吾人は、讀書に際し、一行の終りから次行の初めに飛ぶのに、間違ふことの稀れな様に訓練されてゐるが、象形文字では、書くのも讀むのも、一層困難である。モヘンジョ・ダロでブリストロフドン風が行はれたのは當然である。

然し一方印章の片面に三行以上を見出だすことはない。また屢々兩面にも記してゐる。即ち讀み乍ら間違へる心配は存しなかつた。それにも拘らずブリストロフドンが用ひられてゐると云ふことは、この書風になれてゐるからである。即ち他のよ

り以上長い、それにかういふ方法の指示されてゐた他種書類が存してゐたに相違ない。

例へばハラツバに於て發見された一印章の例を舉ぐると上部の行の文字は、下部の行のそれと百八十度角で背中合せになつてゐる。

ラシドン博士は既に一九二七年までにモヘンジョ・ダロで發見された文字の全彙纂^{コルプユス}を、出版し、ハンター氏はその滞在地印度からハラツバの文字の同様の彙纂^{コルプユス}がまもなく印刷に附せられるだらうと報じ、またそれ以降一九二七年と一九三〇年間にモヘンジョ・ダロとハラツバで發見された印章文字の彙纂を作成したことを報せて呉れた。その中現在まで知られてゐなかつた若干の記號が存在してゐるかも知れぬ。しかし彼は全體現在まで知られた記號表をあまり變動せぬだらうと云つて來た。

英國學者の研究の確かに最も興味ある結果はモ

インダス文字に關するド・エヴェジイ氏の新發見（松本）

ヘンジョ・ダロとハラツバの文字は完全に成立した組織を示してゐると云ふこと、即ち文字は確かに最早單なる意標文字^{イデオグラフィー}でなく、少くとも既に半音節文字^{シラビク}になつてゐるといふことである。

彼等は文字に軸^{チビジュ}をつけたり、縁縫を足したり、上にアクセサン・シルコンフレックスを附したり、その他のアクセント、一種の點を兩側に添へたりすることが出来るのを確めた。要するに凡そ發明の最も特色あり、最も卓拔な「組織的全體」たる證據を發見した。

此處で印度を去つて海を横切り、二萬キロメートルばかりモヘンジョ・ダロの反對方向に移動しよう。オセアニアの司教でありかつ學者たりしジョーサン Jausson 師はその配下の太平洋の僧侶に土俗學的興味のある品物なら何でもタヒティの自分の蒐集のため寄贈して貰ひたいと請求した。かくして彼は一日土人の髪の毛を受取つた。それを送

附した宣教師はヅムボーム Nunoboom 師で、かれこれ七十年も前イル・ド・バークの島に布教してゐた。これは僅か一萬二千ヘクタルしか廣袤のない不毛の島で、その上渺茫たる大洋中、あらゆる國土、あらゆる他の人類棲息地から、例へばバリーからアイスランドに至る位の距離を隔ててをる。

ジョーサン司教は直ちにその宣教師が、髪を纏くのに使用した木板は、他の全體より無限に興味深いものたることを認めた。といふのはその木板は象形文字で満ちてゐたからである。が此處に二つの理由が此文字の發見を困惑せしめた。先づ第一に、今まで曾つてオセアニアで文字の發見されたことなく、又其後も無かつたことであり、第二に此イル・ド・バークこそ既に最も神秘的な現象が、世人の注意を惹いてゐた地點であるからである。

此島には高さ二十米以上に達する非常に容積あ

る古代巨石像、死火山の石を、まるごと切り出し、如何なる方法でか海際まで運搬し、高さ二、三米もある石帽を其處でかぶせ、よつてもつて土人の墓標とした記念物が存するからである。全部でかういふ石像が數百體あり、此島を世界最大の廟所たる觀あらしめたのである。

タヒティの司教は土人が「話す木」と呼んでをる此種の遺品をなほ送附することを請求し、全部で七個受取つた。一方探檢者は同様此島で之を發見し、今日約十五片ばかり知られてをる。然し此字板は木製であるにしろ「小誌はおのがじの運命を持つてをる。」今日此島の字板は全世界に點在してをり、チリーのサンチャゴ、レニングラド、ワシントン、ロンドン、ベルリン、ウイーンナに存してをる。然し最美の品は疑ひもなくベルギー、ブレイヌ・ル・コントに保存されてをるものである。バリーは先史學會々長リヴエ氏の盡力によ

り、是等の諸博物館にやがて凌駕することにならう。と云ふのは、氏はトロカデロの博物館に現存字板全ての正確な模型を集めつゝあるからである。之はついで研究を非常に容易にするに相違ない。

現存の最大字板は疑ひもなくブレイヌ・ル・コントのそれであつて、幅〇・一二米に長約一米に達し、両面に一千五百字以上を載せてをる。レニングラドの博物館に保存されてをる他のものはニュージーランドの會長の持ち、また字板の様に屢々木製なりしメレと呼ばれた棍棒武器の形をなしてをる。此文字の讀み方について或探檢家達、殊に宣教師は左から右に讀むと假託した。が Geiseler, Haberland, Harrison の様な若干の學者は反對の考へであつた。文字を擴大して見ると自分は後者の意見を正しと思はしめたが、更にブレイヌ・ル・コント字板とワシントン字板とに見ゆる二つの異

インダス文字に關するド・エヴェジイ氏の新發見(松本)

例は此處に説明は控へるが、どうしても右より左に書かれたに非ざれば解き難きものである。

次に何處から初まつたかと云ふに、前述した研究者は恐らく土人の云ふ所に従ひ、下の隅、右から左から初まると云ふことを述べてをる。自分は實際彼等がより幸福であると思ふ。と云ふのは自分には何處が初まりであるかと云ふことが出来ぬ。然し自分の字の排列に異例を認めた二つの字板に對しては、確かに上の初行の左から五番目の文字をもつて初まつてをると云ひ得る。その他の字板に就ては何處が發端であるかと云ふことを述べる事が出来ぬ。

本文の解讀に就ては自分の此點に於てなし得た若干の認識を敘述することを避けよう。未だ完了には甚だ遠いからである。しかし自分はその絶えざる反覆を示す文字の機構から強くそのポリネシア語であることを推測せしめられるが、その外確

かに該語であると云ふことを信ぜしめる蓋然的證據を發見し得た。また特に知惹するに興味あり、勿論字板の解讀に非常に貢獻するものはこの様な文字が何を表現してをるかを知ることである。

然し此點吾人は非常な困難に遭遇する。といふのは物を示すため古代の書記、構圖者の用ひた方法は實に特殊であつたからである。たとへば、その人間や魚を表はしたものはすぐそれとわかるが、柄の先に三角形をつけたものが武器であるか、また四つの觸手のついた圓周が龜か又は黃金蟲であるかは一寸判斷に迷ふ。二つの弓が月の弦を表はしてをるとしてもその中央に三角形を書いてあるのが何であるか不明である。また鼻の如きものを持つ動物圖が、象を示してをるのか、また今一つの文字は猿を示すのか疑問であるが、果してそれが確實とすれば、それだけで非常な重大な結果を及ぼす。即ち象も猿も全くポリネシア動物群^{フオーナ}と關

係なく、文字起原地の探究範圍は忽ち縮少するからである。然し殘念ながら文字の殆ど全部に對し吾人はたゞ想像をたてうるのみである。反對に此處に最も困惑すべき檢證がなされ得る。このごく瑣々たる檢證を私がなしたことが、今日諸君に此さゝやかな研究報告を提出するよう御招きを受けるの光榮に接した所以である。

イル・ド・バークの文字とその反對方向のインダス流域の文字とは同じ淵源に屬してをる。それを諸君は、直ちに自ら識別せられよう。予は、コレヂ・ド・フランスの教授シルヴン・レビ氏がモヘンジョ・ダロの新文明を紹介した折の講筵に侍してゐたが、氏は、その時此文字を他の象形文字系統と結びつけるためなされた失敗的試みについて強調された。然し全ての比較の名辭は西方に置かれてゐた。東方には先づ何より先に充分研究されてゐないイル・ド・バーク文字が存在した。自分は此

方面を調べてみよう」と決意したが、その時自分は何の自信も何の熱心もなく、たゞほんの氣休めに思ひたつたのである。自分の手許にはルートレツジの著書に復刻された大英博物館の木板の寫眞あるのみであつた。がその中に自分は直ちに三つの輪が重加され、垂直線で切斷された共通文字を發見した。これは既にごく單純な記號とは云へぬ。

然し未だそれだけでは大した結果にはならぬ。現代の最大な學者の一人であるデュソウ氏がグロゼル問題の論争の際に、同じ記號でも、もしそれが單純であれば、なんの證據にもならぬ。象形文字は、同じ物體の表現に相似るのが當然だと云はれたことを覚えてゐた。もしも同一記號の數が極めて大であり、その上その中に極めて複雑な記號がなければかういふ文字の同源説がたてられぬことは明瞭であつた。所が果してさういふ結果になつたのである。此處に兩者文字の一般的一致を示

すことは控へよう。たとへば兩地で文字使用を支配する同じ修正、結合の要素の使用されてゐること、記號に接合する同様な軸、附加される同様の支へ、及び縁縫の符號、時々其上に置かれるアクサン・シルコンフレックスまで存することは此處に述べまい。

たゞ記號のみに限り、これを比較すれば目的は充分達成せられる。その非常な類似のみならず絶對的な同一の場合さへあることを認め得よう。イル・ド・パークの文字は、確かに一段古版とでも云ふべきものである。その模様がより委しく、より纖細であることは、御覽の通りである。モヘンジヨ・ダロでは恐らく文字をより以上頻繁に使用したらしく、單純化した性質、標準化の要求を見受けるが、イル・ド・パークではそれが缺けてゐる。ペリオ氏により學士院に報告された比較の若干をお見せすると、單純な記號の外に偶然とは云へ

ぬ複雑な記號の間に類似の存することを諸君は、自認せられるであらう。その數は兩方百三十字以上に達してをる。その中でも最も驚くべきは人間を基本とする記號の比較であらう。モヘンジョ・ダロでは人間は、ごく單純な表現、即ち數線で軀幹、腕、足を表はし、殆ど簡單化されて型と云つてよい位のものになつてをる。然しイル・ド・パークの人間の手足の位置、また何より先人間の手に持つ物を比較せられよ。驚嘆すべき類似を發見せられよう。最後により單純な若干の記號、及びその集り、同じアクセントの使用、アクサン・シルコンフレックス類似のものさへ存することに注意せられたい。

淑女紳士諸君！ 是等の一切からなんと結論したらよいだらうか。私が、最初にことはつた慎重、緻密、反省の必要となるのは今である。^(註三)兩者文字の大多數が同様であることを確言することは大膽

ではないであらう。何れにしる此處に舉げた比較のみならずそれより以上精細な予の原稿を、自分はフランス、ベルギー、英國、奥國の學者に示したが、その誰もが之に疑ひをさしはさまなかつた。兩者文字の示す空間と時間との巨大な差にも拘らず、自分の最初に述べた新出發點は充分に與へられてをる。然し次に來るのは何であらうか。此二つの文字の聯絡を何と説明すべきであらうか。

(未完)

註一、ド・エヴェジイ氏はハンガリア人で只今巴里に住されて居る。その著として *Finnisch-Ugrisches aus Indien*, Wien 1932 が公刊され、ムンダ族をフィン・ウグリアンに結びつけんと企圖されてをる。その *The Bulletin of The School of Oriental Studies*, vol. VI, Part I に發表された On W. Schmidt's Munda-Mon-Khmer Comparison (Does an "austric" Family of Language exist?) に就ては、自分は「史學」十卷九六頁の餘白録に紹介したことがある。また去年九月の言語學會議で講演された *Une fausse famille linguistique, "l'Austro-asiatique"* はタイプライター刷の小冊子として惠贈された。最近頗る活躍される新進言語學者である。(一六三頁) (下段)